

2章 益田川流域に伝わる民話調査

「はじめに」で述べたように、益田川に関する各地域の民話およびそれぞれの研究内容を前ページの流域順に紹介する。いずれの民話も、①資料調査を元にした話の内容、②現地の取材・聞き取りした調査内容、③取材調査後、研究・考察した内容、の順に記載した。

1 高山市高根町地域の民話

高山市高根町は、飛騨と信州を峠で結ぶ交通・物流の要所であった。益田川の水源をなす乗鞍岳南麓の水の一部は高山市高根町野麦・阿多野集落に集まり、また、御岳北麓の水の一部は日和田・小日和田集落に集まる。日和田地域に伝わる民話のうち、「ちんまが池（ちんま池）」や「杣ヶ池（小三郎池）」の話が有名である。

(1-1) ちんまが池

①話の内容

昔、日和田の村に原助と呼ばれる大百姓がいた。千頭以上の馬を広い牧場で飼っており、木曾福島の馬市に売り出したといわれている。原助の家には、多くの下女がいたが、そのうちでも年頃では二十歳前、器量がよくて気だては優しい仕事も人の三倍はするというのが「おちん」だった。おちんがどこのどういう女だということは誰も分からなかった。不思議なことだが、とにかく三拍子そろった女中だった。

ある日、原助が露天風呂をたかせ入浴していると、夕立がきた。すると、飯支度していたおちんが飛び出してきた、桶に原助を入れたまま楽々と軒場に運んでいった。原助たちはおちんの怪力に度肝を抜かされたという。おちんを嫁にほしいという人が多かった。だが、おちんはみんな断ってきた。

ところが、隣村の小三郎という木こりが、日和田へ木を伐りに来ていて、おちんを見染めた。嫁にほしいと思い頼んでみた。誰もが断ると思ったが、おちんは意外な返事をした。

おちんが沢山のたんすやつづらを持って嫁入りしたのは、間もないことだった。しかし、おちんがこれらの品を町から買ってくるのを見た人は誰もいなかった。

ある日、小三郎は山で木を伐っていた。昼過ぎ、小三郎は水を飲もうと谷川に行った。見ると、昼飯を食って谷に沈めといたメンパ(弁当箱)に、でっかい岩魚が二匹入って泳いでいる。小三郎は捕まえて、塩焼きにして食べた。においがよく、味もよかった。小三郎は、友達の木こりのために残していたもう一匹も我慢できずに食べてしまった。

少したつと、喉がひどく渇いてきた。はじめは柄杓で水を飲んでしたが、ついにはメンパで飲み、桶で飲み、しまいには川に口をつけて飲みだした。だが、いくら飲んでも喉は潤わない。飲めば飲むほど喉は焼きつけるようになった。



ちんまが池跡(7月20日)

もうこれまでだ、と思った小三郎は、友の木こりが、山から下ってくるのを待って苦しい息もたえだえにすべてを話した。話し終わった小三郎は、またガブガブと水を飲むと、みるみるうちに蛇へと変わった。きらきら光る鱗を生じ、尾の先には剣が現れ、ぐるりぐるりと池を掘っていった。

あまりの様子に、木こりは山から降りた。そして、ふもとまで逃げ終わった直後、山は裂けて崩れてしまった。そうして、ふしぎにも、小太郎が大蛇になったその時から、おちんの姿もみえんようになった。小三郎の家では、息子と嫁の行く方知れずで大騒ぎしとったんだが、ころがりこんでできた木こりが、一部始終を話した。

「小太郎が大蛇になったと。信じられん。おら、てめえの目で確かめてくる。」

と、小三郎の母は、人のとめるのも聞かずに飛び出していった。

木こり小屋のあった近くまできてみると、崩れた山はいつのまにか青黒い水を満々とたたえた大きい池となってしまった。それをみて母親は悲しみのあまり泣き崩れてしまった。

すると、池の水がぐるぐると渦をまき、ものすごいねりが生じてすぐさまに、両眼はギラギラと鏡のごとく、角をつけた大蛇がザーッと顔を出した。

「おお、小三郎か。ほんになさけない姿になりはてたなあ。たった一度だけでええ、おまえのもとの姿みせてくれ。」

白い波が岸に向かってザザザーッとよせたかと思うと、池の端には小三郎がもとの姿のままポッと上がってきて、

「おっかあ、おれはおちんに見込まれて、この池の主になった。おれがこの池におる限り、おっかあとおとはたしかに守ってやるで…。ああ、なんというあさましいことだ。こう言つとるうちにも、おれはおっかあを食っちゃみたい気がする。早く家へ帰ってください。」と、それだけ言ったきり、ザンブと池にとびこみ、ふたたび姿を現さなかったという。

この小三郎池の奥には昔からひとつの池があった。その池の主が大蛇のおちんで、小三郎をつれこんで、夫婦の大蛇になったと伝えられている。

(『私たちの調べた野麦街道の民話』ほか)

②取材調査

高根町日和田地域は岐阜県と長野県の境にあり、長野県木曾町の開田高原に抜ける集落である。近年高地トレーニングセンターとして開発されている。「ちんまが池」や、「ちんまが池」にほど近い「杣ヶ池(小三郎池)」にもクロスカントリーコースが整備されていた。高山市役所高根支所地域振興課の中島美奈子さんから話を聞いた。

- ・現在「ちんまが池」はほとんど水がなく、湿地になっているが、かつては水があったという。

「杣ヶ池」は白樺林の中にあって、今も水を湛えている。

- ・「杣ヶ池」には神社があり、幻想的な場所となっている。神社には毎年8月の第一土曜日に、一森八幡神社の氏子たちが集まり、例祭が行われている。



高地トレーニングエリア
(7月20日高山市高根町)



「ちんまヶ池」の名が残るクロス
カントリーコース (8月9日)



柚ヶ池周囲の白樺原生林(8月9日)



柚ヶ池 (8月9日)



柚ヶ池横にある神社 (8月9日)

③研究・考察

二つの物語に共通して登場する「原助」とは何者か。『益田郡誌』を確認すると、「高根村大字日和田の豪家、通称原助」とある。大馬親方であり、大地主でもあった原助次郎のことと思われる。『斐太後風土記』などの史料でも、かつて高根は木曾馬の産地として有名であったことが伝えられているが、原家の勢力は大きかったらしい。



日和田村小日和田村
牧場の図 (部分)
(『斐太後風土記』飛騨
高山まちの博物館蔵)

『高根村史』などから「原助」に関する逸話を拾うと、

- ・日和田から（木曾）福島までの9里半を、他人の土地を踏まずに行けた。
 - ・木曾の市場へ馬を連れて行くが、最初の馬が福島に着く頃、最後の馬が原家を出た。それくらい多くの馬が列をなしていた。
 - ・家の前の日和田川に沿って 11 棟の水車小屋があり、それぞれの水車を動力にして毎日 粳すり、精米、粉ひきがされていた。これらの仕事には奉公人をあたらせていた。
- といった話があった。真偽は別として、原助のような人物がいた時代が二つの物語を生んだ背景にはある。

原家は昭和以降没落する歴史を辿るが、原家の外壁や石仏群は今も文化財として残されている。



原家跡（7月20日 高山市高根町）



原家跡の石仏（7月20日）

高根に伝わるもう一つの民話「杣ヶ池」では、「ちんま」が小三郎に恋をして、会いたい一心でイワナに姿を変えている。のどが渇き、水を飲み続けた小三郎が、ついに龍になった話になっている（『高根村史』ほか）。

『斐太後風土記』には、雌池と雄池のことが記されている。雌池は「ちんまが池」、雄池は「杣ヶ池」のことを指す。

雌池については、「池辺樹木森立、荊棘繁生、藤葛蔓延して、其周廻詳ならず、東方池汀の樹間より、池面を眺望するに、水光激（れん）灑（えん）漣（れん）漪（い）相連、恰も湖水を望むが如し」とあり、美しく、水があるように見える池であったことがわかる。

一方、雄池については、「景色雌池と大に異なり、…無人の地にて、寂寥として、ものすごきこと云はん方なし」と伝えている。さらに、「村民言傳て、他方の人來つて亂行せむ事を、堅く禁め、此の池靈ありと云ふ、若し固く猥に池中に石礫をうち、枝杪を折て投れば、必ず祟ありて、晴天俄にかきくもり、夏天にも雹を降らし、作毛を損ふことあり、或は亂行人、不意に瘡疾に罹ると云ひ傳へたり」と記されている。

現地取材の際、杣ヶ池の場所を確認するために日和田トレーニングセンターに行き、職員の方に道を尋ねた。すると、「池に物を投げ入れないように。雨が降るからな…」と言われたが、その理由が資料によって確認できた。昔からの言い伝えが現在も残っていることがわかった。

(1-2) カッパ (かわっぱ、ガオロ、ガーランベ) の話

①話の内容

小日和田地区の公民館があって、あそこに三境橋があるんですわ。三つの境の橋、通称「見境橋」なんですが、その下流に、少し下がった所に、「吉助淵」という淵があったわけですが。

吉助という人がその、河童にお尻をもがれたという伝説があって。で、吉助淵に行くと河童がおるから危ないぞという。それが今、その淵があせて、まあ浅瀬になっとなるけど、うちの小さい頃は水の量が大きい淵でした。[高根町留之原]

(『飛驒の民話・唄・遊び』ほか)

むかしは、この益田川にもかわっぱがおりましてなあ。

朝早う、あその岩にのぼって、頭をといておったっていいますがな。

かわっぱは、きゅうりの尻が大好きだっていいますわ。

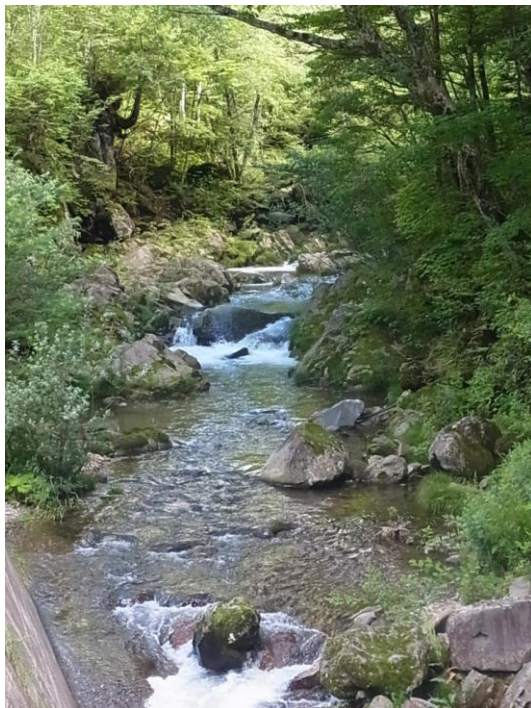
昔は、子どもが幾人もかわっぱに引きずりこまれてなあ。かわっぱは尻の子、尻から抜くっていいますなあ。

(『私たちの調べた野麦街道の民話』)

②取材調査

「吉助淵」は、日和田から小日和田に向かう途中にある。「三境橋 (さんきょうばし)」からみえる川には遊べるような広さはなかったが、昔は子どもたちが水遊びできるような場所だったという。

野麦地域にも取材に出かけた。長時間の山道の車の運転に酔ってしまう人もいた。停車した道沿いに保安林を示す看板があり、そこには「益田川」の文字があった。集落の人に聞いても「飛驒川」より「益田川」のほうが一般的であるらしい。



吉助淵 (7月20日)



三境橋 (7月20日)



「益田川」と表記されている野麦地域保安林の看板 (8月9日)

③研究・考察

日本各地にカッパの話が伝わる背景について、授業で意見交換した。「川の神」だと考えられていたのではないかという意見、川の怖さを伝え、危険な川に近づかないために作られたのではないかという意見、そして実際にいたのではないか、といった意見があった。

益田川のカッパに関する話は高山市朝日町や下呂市金山・馬瀬の資料にもみられる。

「尻の尾」

水浴びに行くとガウロに「尻の尾」を抜かれたということがあった。「尻の尾」というのは、まあ、腸じゃな。抜かれるってことは食われる。「あそこにガウロがおったぞ。尻の尾とられるぞ」と言った。

私ら八つから九つの時代、川のこういう淵の水のたまったところで、バシャバシャやってた。そこへ行くと、「ガウロがおるので、尻の尾とられるな」と親が言った。「川に遊びに行く時にはきゅうりを食べんなよ」って言った。私の親たちは。ガウロはキュウリが好きやったもんで、きゅうりを食べたこどもは「尻の尾」を抜かれるってことを言ったんだわね。[朝日町立岩] (『飛驒の民話・唄・遊び』)



「カッパに会わないまじない」

子どもの頃、川へ水浴びに行くときには、「ガオロ」に取られると言って、ミョウガの葉を口にくわえて水に入った。ガオロはミョウガを嫌うからである。[朝日町大広]

(『飛驒の民話・唄・遊び』)

「たか橋のがあらんべ」

菅田川の真っ青な淵に一匹のがあらんべが住み着いていた。日照りが続いて川の水が減り、魚の姿が見えなくなると、があらんべは退屈になって丸太橋をゆすりだした。

橋を渡っていた馬方は驚き、馬は川へ落ちた。それから夏になると時々、たか橋で悪いことが起きるとい話が知れ渡り、あきんどたちは、村へ出入りしなくなった。

村人たちは庄屋の家に集まり、があらんべ封じの手を考えた。佐見の百姓が、があらんべがこわがるのは、弁天様だと言い出した。そこで、村人達は石工を雇って弁天様の碑を作らせた。

淵を見下ろす小島のでっぺんに弁天様を担ぎ上げ、坊様が読経をし、多くの男や女が心経様の合唱をはじめたころには、淵の底のがあらんべは、もう、手足が動かせなくなっていた。それから、たか橋に悪いことは起きなくなり、村へ、あきんどたちも入ってくるようになった。

(『金山町のむかしの話』)

「ガーランベ (河童)」

昔、馬瀬川のどっこにもガーランベがいたらしい。このガーランベは人間のイドコが好きで、川へ行くときはきゅうりを食べて川へいってはいけないとか、深いところへは行くなつて言われた。しかし、馬を川で洗っていたらガーランベが現れて尻尾をつかんだが、馬がけりをいれて手だけが残っているとされる。(『馬瀬村の古里のはなし』)